慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴンクール兄弟『ルネ・モープラン』(第二十一～二十四章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt Renée Mauperin (chapitres XXI–XXIV) (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.61 (2015. 10) ,p.100(23)- 122(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20151031-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール兄弟『ルネ・モープラン』

（第二十一～二十四章）（翻訳）

山本武男

これまでのあらすじ

モープラン家で催される文藝サロンで、その家の次女ルネは、幼年時代からの友人、富豪ブルジョ家の娘ノエミと演劇で共演することになり、その稽古に忙しい日々を送っている。勝気で口の悪いルネに比べ、一見大人しいノエミ。パリで経済評論家として活動する、ルネの兄アンリも舞台に立つことになっている。演出はルネの幼馴染みの青年ドノワゼル。ルネは、稽古中ノエミが兄アンリの前でお高く留まったような意外な姿に戸惑う。芝居の本番は大盛況であったが、アンリとノエミが真に迫った恋愛関係を演じる姿を通して、何もかもを悟ったノエミの母ブルジョ夫人は、気を失ってしまう。アンリには夫人の忠実な愛人としての裏の顔があり、夫人もそれを信じていたが、実は、夫人と関係を持ったのは、本来なら資産が釣り合わないブルジョ家の娘ノエミに近付く為の策謀だった！　真実が発覚して以来、夫人には、アンリの親

切で穏やかな好青年の仮面の奥に潜む、冷やかで、狡猾な計算高い素顔が見え始める。物語は、それでも夫人が、思いを断ち切ることの出来ないアンリを再び訪ねるところから始まる。

〔翻訳〕

二十一

アンリは準備を済ませ、服に着替えて待っていた。彼は巧んでだらしない身づくろいをしており、形式張らないよう努め、わざと不調和を作り出し、朝、若い男なら、ほぼ違うことなく魅力的に引き立つ、あのよくありがちな着こなしをしていた。

手紙に記された時間に呼び鈴がなった。アンリが戸を開けに行くと、ブルジョ夫人が入って来て、住居をよく知っている女のくだけた様子と足取りで彼の前を通り過ぎ、そのまま書斎の奥に置かれたソファに腰掛けた。

最初、二人は黙っていた。ソファの彼女の坐った隣は空いた儘だったが、アンリは喫煙用椅子を引き寄せるや、その用途通りそれをくるっと回すと、馬乗りになり、背もたれの上に両腕を組んで乗せた。

ブルジョ夫人はレースの二重になったヴェールを持ち上げ、帽子の上に引っ掛けた。顔をややのけぞらせ、片方の手でのろのろともう一方の手から手袋をはずしつつ、周囲のもの、壁に飾られた美術品や暖炉の上の置物を眺めた。彼女は恰も自分ひとりでいるかのように小さく溜め息をつき、それから視線をアンリのほうに戻して、

「ここには、わたくしの人生の一部があるの……わたくしのかけらよ、これらのすべてが！」と言った。

やがて彼女は手袋をはずした手を彼のほうに差し出すと、アンリは敬意を込めてその指先に接吻した。

「許してね」彼女はまた話し出す。「自分の事なんか、あなたに話す積りじゃなかったのよ……そんなことの為に、わたくしここへ来たんじゃなくってよ……ああ！　心配なさらないで……わたくし、今日は冷静、お約束致しますわ。最初は……それは！　最初は辛うございましたわ、それは否定致しません、あなた……愁嘆場でございましたわ」彼女はしめっぽい微笑を湛えて言った。「でも、今はそれも終り……もうほとんど苦しくないわ……それにわたくし、強くなりましたの、ほんとよ……ああ！　おそらく、一日にしてすべてが消え去ることはないでしょうし、あなたは最早、わたくしにとって何ものでもない、などと宣言したくもないけれど、信じてはもらえないかもしれない……でもあなたに誓って言えること、これは信じて頂かなくては困ることよ、アンリ、あのね、わたくし、もう心のなかの情熱が、からっぽになってしまったの……だから弱さもなくなった……女の死、完全な死よ……そしてとても澄み通っているの、分かったかしら、今、わたくしはあなたに対してこんな状態なの……」

日の光があたっていて、話しつつ彼女は直射日光を見てしまったらしく顔をしかめていたが、「日除けを下ろしてくださらないかしら？　あなた」と言った。「あの日の光……二三日前から目がひどい炎症を起こしているの……」

そう言われてアンリが窓際に行っている間に、彼女は帽子のリボンをほどき、身を被っていた大きめのショールを肩から少しずらした。日除けのお陰で柔らかくなった部屋の光の中で彼女はさらに話し続けた。「そう、アンリ、たくさんの葛藤があり……胸の張り裂ける思いを何度もして……あなたにはけして理解できないでしょうけれども……幾夜ものそんな苦しみを経たけれど……あなたにはこれまでと同じようなことは望まないわ！……

泣いたり、祈ったりしたおかげで、わたしは自分を乗り越えた、わたしは自分に勝ったのよ……わたしは娘の幸福を考えた、妬いたりせずに……そしてあなたの幸福を求めたの、この地上でまだわたしに許されているたったひとつの幸福を！」

「あなたは天使だ、ロール！」そう言ってアンリは動揺しているふりをしつつ絨毯の上を歩きだした。「だけど、物事というものはありの儘に見なくてはいけませんよ……そうでしょう！　かつてあなたは賢明だった、我々は永久に別れなくてはならないとおっしゃいましたよね……二度と再会してはならないと……近くで人生を歩むべきではないと！　そのお考えを貫かなくては！……我々の心がもつ傷のようにじゅうぶん治癒していないものは何かの弾みですぐまた開いてしまうのです！……それに、もしあなたが自分は大丈夫だといっても、わたしの方も大丈夫だと、誰が言えますか？　そんなふうに何時も近くにいて、一生そんな誘惑のなかにいたら……つまりあなたの傍にいたら」彼は優しい口調で言った。「誰が、過ちの機会や思いがけない出来事など無いと保証できるでしょう？……だいたい、わたしは自分に正直な男なんですから」

「そんな風にはならないわ、アンリ」手を取って彼を彼女の傍に坐らせて、「あなたに関してわたくし、何の心配もしていなくてよ……それにわたくしの方だって大丈夫だわ。すべて終ったのよ……何にかけて、お誓い申し上げたならよろしいのかしら？……ね、拒絶しないで下さらない……いやよ、わたくしに残された唯ひとつの幸福だもの、拒んでいただきたくないの、たった一つの幸福なのよ、念を押すけれど……だって今、わたしの世界にはそれだけしかないんだもの！　あなたに会うこと、あなたに会うことだけが生甲斐なのよ！」そう言って若者の首の周りに両腕を回すと、彼女は抱きついたが、そのときアンリは彼女がコルセットをしていないのを感じた。

数秒間の抱擁のあと、

「ああ！　この通り、出来やしないじゃないですか！……このことについてお話しするのはもうよしましょう」突然そう言うとアンリは立ち上がった。

「強くなるわ、わたし」意を決した風にブルジョ夫人が言った。

この様にひとたび諦めを宣言する劇を演じ終ると、二人とも少し楽になったように感じた。「それでは」ブルジョ夫人がまた話し出した。「お聞きになって……主人があなたに、うちの娘をやることになるでしょう」

「本当に、本気なのか、ロール……」

「話を続けさせて……主人は娘をあなたにやることになるでしょう……主人は娘婿にそばにいてくれって言うと思うの……そのほかは全て自由という条件でね、住居も馬車も料理人も別々でいいということね……わたくしたちの暮らし方は、あなたご存知よね……主人の考えが変わりさえしなかったら、「彼女」は百万の持参金は得られるはずよ、それにあの人が破産さえしなければ、それはありうる事だけれども、わたしたちが亡くなった後には、あなたには、四百万ないし五百万手に入ることになる……」

「でもどうしたら、持参金が百万もあり、やがてそれが五百万にもなるであろうブルジョ嬢を、本気であなたはわたしに嫁がせる気になられたのでしょう……？」

「わたくしは、あの子の母親よ」決然とブルジョ夫人は答えた。「それともあなた、あの子のことがお嫌いなの？　ばれたわね！　また、いつも通りの打算なのね……」そう言うとブルジョ夫人は微かに笑った。「あの子を仕合せにしてあげてよ……あなた」

「でも、世間をどうあしらえばいいか？」

「世間？……子供ね！」

彼女はちょっと肩をすくめてめせた。「彼らを口止めする方法なんて幾らでもあるわ……」

「じゃ、ブルジョ氏は？」

「それはわたしに任せておいて……あの人、二月するかしないかのうちにあなたのことが好きになるわ……ただ、あなたがあの人の人となりを知っていさえすればいいだけよ。あのひと、爵位を要求してくるわ、娘婿にはいつも公爵に来て欲しがっていたから……わたしにできる事といえば、貴族の苗字の前に付く小辞のドの方に注意を向けさせることくらいだけれど……今日、苗字に土地や森や野っ原や、なにがしかの小さな畑の名を加える許可を得ることほど容易（たやす）いことはないわ……あなたのお母さまがオート＝マルヌのおたくのヴィラクールの畑についてお話ししているのを、わたくし、お伺いしたことがあったのではないかしら？「モープラン・ド・ヴィラクール」……これはなかなかいい響きだわ……でもお分かりでしょ、わたくしにとっては、こんなこと、こだわるほどの事ではないの……」

「いやはや！　それ位のこと、何でもないじゃないですか……わたしの原則……わたしの自由主義から言って……わたしのように政治参加していれば……それにわたし自身の性質に照らしてみても……」

「まさか！　あなたもやがては、これは妻の気紛れに従ったまでです、なんて言うことでしょう……でも、誰もがこの名前って呼ばれるものの何かを身に着けているわけじゃない、十字架みたいなものよ、名前は！　法務大臣に口利きして差し上げましょうか？」

「いやいや、結構です……いや、およしになってください……小辞を受け取る覚悟があるとまでは、わたくしは一言も申し上げていない筈ですよ……本当は分らないのです、その点については、きわめて率直に申し上げまして……あなたにお返事をする前に、わたしは熟慮し、自分を理解し、自分のすべき事を見積もる必要があるのだということをご理解いただきたく思います」

「あなた、今週中にわたくし、あなたのお母様にお会いしに参ってよ」ブルジョ夫人は立ち上がってそう言う

と、手を差し出した。「さようなら」悲しそうに彼女は言った。「人生とはひとつの犠牲的行為ね！」

二十二

「ルネ」ある夜、モープラン夫人は娘に向って言った。「明日、マンズベリー卿のコレクション展を見に行かない？　とても面白そうなの……十万フラン以上で売りに出ている絵が一枚あるって話よ……バルースさんはあなたがそれに関心を持ちそうだって考えていらしたわ。彼、わたしにカタログと、入場券を一枚送ってくださったのよ。あなた、関心あるんじゃない？」

「そうね、面白そう」とルネは答えた。「ほんと、行ってみたいわ」

翌日になると母親が、身づくろいをしているところに来て彼女を手伝い、いちばん最新の帽子を被らせたので、ルネはちょっと吃驚してしまった。

「だって、分るでしょ、ちょうど今、あちらこちらの展覧会は大変な人の出だから」モープラン夫人は娘の帽子の紐を結び直しながら言った。「あなたも、他の人たちと同じ様にお洒落しなくちゃ」

展覧会は特殊な傾向を帯びたものであったが、競売場の一階のマンズベリー卿の蒐集品が展示された部屋には人々が詰めかけていた。絵画作品の名声はもとより、マンズベリー卿がパレ・ロワイヤルの女優に入れあげた結果、催さざるを得なくなったというこの競売の醜聞が、オテル・ドゥルオの常連から、数年来の競売の流行でそこへ足を運ぶようになった人々や、有象無象の大衆、美術品に群がる野次馬、有名な愛好家、はたまたパリのほとんど全ての物見高い人々を引き付けた。

遠くの群集にも見えるように、売りに出ている三、四枚の高級な絵画は、離れた壁の高い所にまで引き上げら

れなければならなかった。部屋には、金持ちが集まる競売に特有のあの声を落とした遣り取りや、上がって行く値段が引き起こすあのざわめき、煽り立てられる気紛れや、釣られて起る無分別、銀行家同士の競争、また加熱した金銭をめぐる虚栄心などが溢れていた。付け値を相談しあうひそひそ声があちらの一団で聞こえたかと思うとこちらの一団からも聞き取れた。商人たちの表現に従えば、「波立っていた」のだった。

部屋の入口で、モープラン夫人とその娘は、バルースがある三十歳くらいの若い男に腕を支えられているのを見た。この若者は大きくて優しそうな眼をしていたが、もう少し聡明そうであれば、美しい眼をしているといえたであろう。肥満しはじめている太めの体つきの彼は、かなり平凡な印象を与えた。

「おや、これはこれは、奥さま」そう言ってバルースはモープラン夫人のほうへ向ってきた。「わたくしの若い友人を紹介させていただいて宜しいでしょうか、ルムニエさんです……彼はコレクションに関しては精通しておりますよ、もしガイドが必要なら、彼がみどころをご案内するでしょう……わたくしは、三番の部屋で頑張って競り落としてみたいものがありますので、ここで失礼いたしますが」

部屋をひと巡りした。ルムニエ氏はモープラン夫人とその娘を最も有名な画家たちの絵の掛かっているところへ連れて行って、ただそれらの主題について説明したが、絵そのものに関しては話さなかった。ルネはそのことを、思わず内心、彼に感謝した。展覧会を一巡し終ると、モープラン夫人はルムニエ氏の腕から手を離し、彼に礼を言い、挨拶をしあった。

ルネは隣の部屋を見たがった。彼女が入ると最初に目に飛び込んできたのは、バルース氏の背中、競売に心が躍動している愛好家の背中であった。競売吏に一番近い席を占め、すぐ隣には縁なし帽を被った女商人がいたが、この女は氏の肘を押したり、膝に打ち当ったりしながら、彼が隠している積りの付け値をちらと見、興奮しきって、競売吏や競売人、また鑑定人や部屋の人々にそれをそっと漏らす様な素振りをする始末だった。

「さあ、いらっしゃい、あなたは十分に見たでしょう」少しするとモープラン夫人が言った。「それに今日は、あなたの姉さんのうちに行く日でしょ、これから行けば丁度いいわ。今年はわたしたち、あの子のうちにまだ行ってないから、あの子も喜ぶわよ」

ルネの姉、モープラン家の長女、ダヴァランド夫人は典型的な社交婦人だった。社交界が彼女の生活を、そして彼女の全思考を満たしていた。子供を持つこと、彼女はそれを夢見ていた。初聖体の時分にはもう、彼女はそれを切望していたのだ。彼女は非常に若くして結婚した。彼女は、最初に紹介された「良い」男を、ためらわず、惑わず、出会ってから僅かのうちに相手として受け入れた。彼女が結婚したのは、ダヴァランド氏ではなく、ある一つの地位であった。彼女にとって結婚とは、馬車であり、ダイヤモンドであり、召使であり、人を家に招待する事であり、知人たちであり、ブーローニュの森の散歩だった。彼女はそれらを全て手に入れ、子供はまだないものの、お洒落を愛し、そして幸福だった。一晩に三つの舞踏会に出たり、晩餐会の前に四十人分の品書きを並べたり、社交婦人の面会日に足繁く通い、仲間に入れてもらったり、といったこと以外に幸福があろうとは想像することも出来なかった。

すべてを社交界に託し、ダヴァランド夫人はそこからあらゆるもの、思想、判断、慈善の施し方、内面の処し方、感じ方に至るまでを取り入れた。彼女は、ロール、即ちブルジョ夫人の家に集まる、被り物を被った女たちの意見を自分のものとした。彼女は、品が良いとされることを考え、上品だとされる服を身に着けた。すべて、その仕草から部屋の家具に至るまで、その遊びから施しに至るまで、読む新聞から料理人に注文する料理に至るまで、彼女は良い趣味に、すなわち彼女の規則と信条に沿わせようとした。彼女は行く先々では何処ででも、ブッフ＝パリジアン座に於いてでさえも、流行を追い求めた。ブーローニュの森では、二三の娼婦と知り合いになる事を学んだが、それはすれ違ったときに名を呼ぶためであり、行為としてはいわゆる良俗に適うことであっ

た。彼女は自分の苗字を、dにアポストロフィ、そしてAと大文字で続け、ダ・ヴァランドと綴ったものだった。

ダヴァランド夫人は信心深かったが、神は彼女の目には「粋」なものに映っていたのであった。彼女には、自分の小教区の教会に通わないのは、手袋を付けないのとほとんど同じくらい無作法なことに思われた。そんな彼女が帰依していたのは、美しい婚礼が執り行われ、名高い人々が挨拶を交し、椅子には紋章が付いていて、教会守衛が金色の目立つ制服を身に纏い、パチョウリ香油の香が漂い、日曜日に歌ミサから出て来れば、教会前の広場の様子は、マリオが歌った後のイタリア座の桟敷を彷彿させる、そんな教会堂のうちの一つだった。彼女は、聞いておく必要があるとされた説教師の説教に通った。彼女は告解所に於いてではなく、修道院に行って告白した。僧侶の名と人柄は秘蹟において彼女には大きな役割を果たしたので、ブランポワ神父以外の神父に婚礼を取り仕切られても結婚したとは思えなかったであろうし、洗礼祝いのドラジェの箱に二百フラン札を入れて主任司祭に送らない者があれば、その洗礼が良いものかどうか疑わしく思われた。

教会も救済も、なにもかも社交と心得ているこの女は、完全に、自然に、根本的に貞淑であったが、その操の正しさには努力も、誉むべきところも、自覚も見出されなかった。サロン生活のあらゆる機会、あらゆる要請に応じて現れる、例のめまぐるしさ、まがいものっぽさや色好みな雰囲気において、彼女は、夢を見るには心の豊かさが足りず、退屈するには機知に欠けていた。欲求や関心が、彼女には不足していたのである。幸福にしてまた偏狭なこの性質のおかげで、彼女は過ちを犯す素地を持たなかったといえる。彼女は、パリの女に珍しい、誘惑が横切っても掠りもしない、難くせのつけようもない賢明さを身に呈していたので、大理石が冷たい理の如く、彼女は正直であった。肉体的にも、ときどき無気力体質で敏感な人に起こることだが、社交界で力を使い果たすことで、彼女は肉欲から遠ざかり、神経を甚く擦り減らし、訪問や競馬によって動揺すれば血の流れが悪くなり、愛嬌を振りまくのにも苦痛を覚え、夜会による困憊、夜中の疲労、翌日の無気力を繰り返した。パリの社交婦人

の役割は、命と熱を費やし、気力と優雅さを緊張させる点で、練習の疲れの中に性欲を失う曲馬や綱渡りをする女たちの職業に似通ったところがあるわけである。

モープラン夫人とその娘はダヴァランド夫人と、その家の食堂で出会ったが、彼女は非常に愛想よく、青い色眼鏡をかけた髭のない男を送り返すところであった。

「御免なさいね」彼女は戻ってくるや、母と妹に抱擁の挨拶をしながら言った。「今の方、ロルドノさん、サクレ＝クールの建築家……わたしの寄付集めのことでお付き合い頂いているの……この間など、千二百フランもお出しくだすったわ……ご立派よ、だってベルティヴァル夫人なんか八百フランにも達さないもの……それはともかくこうしてお会いできて……ようこそいらっしゃいました。どうぞこちらへ、今日はお客さんは多くはありませんから、テズィニー夫人、シャンプロマール夫人にサン＝ソヴール夫人、以上よ、あ、それから、ふたりの好青年、ロルサックさんの息子さん、ママンはご存知よね、あの方と、そのお友達のメゾンセルさんの息子さん……待って」ルネに向って言って、ちょっと手のひらを髪にあてて押さえるようにして、「前髪を垂らしすぎよ……」と窘めると彼女は客間のドアを開けた。「奥さまがた、わたくしの母と妹でございますわ」

彼女らは立ち上がって挨拶し、また坐ってから向き合った。ダヴァランド夫人の三人の友人たちは安楽椅子にどっかりと腰を据えており、椅子が柔らかいせいでしどけない姿勢をしていたが、たっぷりとしたドレスに体の殆どは被われ、ふっくらしたスカートは腕の下辺りにまで盛り上がっており、皆、可愛らしく見えた。心地よい身なりで、お洒落な小さい帽子や、人形の手に似合いそうな手袋、芸術的にカットされた服の胴の部分、化粧とそれを引き立てる細々した工夫、可憐な姿勢、小粋な物腰、気儘な手振り、気紛れな体の動き、サラサラと優美な絹の擦れ合う音、彼女らはそういったパリジェンヌが自分を魅力的に演出するために持ちうるあらゆるものを

駆使していて、もとは美しくなくても、微笑や視線、細部や見せ掛け、機知や明るさ、身体で漂わせるちょっとした賑やかさなどを用いて可愛らしく見せる術を体得していた。

友人同士の二青年、ロルサックとメゾンセルは二十歳の青春真っ盛りで、桃色っぽい白い肌は健康に輝いていたが、まだすこしあどけなさを残していて、髭も薄く縮れており、若い娘の来る日に呼ばれたのを喜び、椅子の前のほうに腰掛けて恭しくしていた。そこにいるのはしっかりとした教育を受けたふたりの若者であった。彼らは、ある僧侶が所有する寄宿舎の出身であったが、そこでは毎晩、僧侶の姉が、玉突き場で一杯のお茶を供する夜会を催していたものであった。

会話が再会された。

「アンリエット」テズィニー夫人がダヴァランド夫人に向って声をかけた。「わたしたち、明日、ビュッサン嬢の婚礼を見に行くのでしたわね？　みんな行くって言っていたわ……評判になっていてよ、あの婚礼は！」

「それなら、迎えにいらして……で、新郎はどんな方かしら？　有名な方？　あなたはご存知？　サン＝ソヴールさん」

「いいえ、まったく」

「いい結婚なのかしら？」

「全然だめよ」とシャンプロマール夫人。「彼、何にも持っていやしないわ……せいぜい一万五千リーヴルの年金があるきり」

「ねえ」モープラン夫人が思い切って意見を述べてみた。「だけど、奥さま、一万五千リーヴルっていえば結構な額なのでは……」

「あら！　奥さま」とシャンプロマール夫人が返した。「だって、今日では、その額では彼の宝石の台座の宝飾

類を変えることすらできないのよ……」

「ロルサックさんは、結婚式にはお出になるの？」ダヴァランド夫人が訊ねた。

「行こうと思います、もし御所望でしたら……」

「それでは！　わたくし、そう望みますわ。わたくしの為に、席をふたつ取っておいて、ね。そうしないとあの仕立て屋が作ってくれたドレス、たっぷりしすぎていて文句がでると思うから。淡灰色を来て行っていいわよね？」

「勿論よ」テズィニー夫人が答えた。「昔風のモヘア地が混ざったやつね。メゾンセルさん、わたくしにも席をふたつ、お忘れにならないでね……」

メゾンセルは会釈した。

「で、もしいい子にしていたら、水曜日にはわたくし、一緒に踊ってさしあげてよ……」

ロルサックはメゾンセルのことを思って、顔を赤らめた。

「あなたは社交界には行かないの？　お嬢さん」サン＝ソヴール夫人は近くに坐っているルネに訊ねた。

「行きませんわ、奥さま、好きじゃありませんもの」モープラン嬢は少々冷淡に答えた。

「ジュリー」テズィニー夫人がシャンプロマール夫人に話しかけた。「ねえ、もう一度お話しして、あなたが言っていた、例の新婦の部屋について……ダヴァランド夫人はあのときいなかったから……ちょっと聞いて、あなた」

「そうね！　あれは、わたしのシーツやタオルを整理したり支給したりしている女が教えてくれたことですわ……想像してみて、壁は白繻子で覆われていて、そこにはブロンドレースのアップリケが施されて、波模様の繻子のルーシュが幾つものパネルを描いている……シーツに関しては、人が見本を見せてくれたのですけれど……

バティスト織で、蜘蛛の巣状になっているのよ！　敷布団は白繻子で……スカイブルーの片撚り糸の結び目を見せてキルティングされているのがシーツを透かして見える……それから屹度あなたを驚かせると思われるのが、そういった品々のすべてが、堅気の女性のために作られているということよ」

「ああ！　そうね」サン＝ソヴール夫人が言った。「その点がいちばん驚きよね……今は、ああいったものはすべてあばずれ女のためのものと看做されているから……田舎で、わたしに降りかかった事件、ご存知ないわよね？　とてもいやなことよ。近所に、ひどく質の悪い女がいてね……ミサで出会うと、彼女、白い服を着ているのだけれど、想像してみてくださらないこと！　その土地に来て以来、彼女が何もかも値上がりさせてしまったの……城館では、女性労働者ひとり雇うのに今十五スーから払わなくてはならないのよ……金は、この種の手合いは、お分かりでしょ、何もしなくても貰っているのよ……この気前のよさで彼女は崇拝されているの、あの陰謀家ときたら。彼女は農民の世話を見る積りらしく、子供たちには仕事を与えていて、二十フランもあげているし……彼女が来る前までは、少しの金額で働き手を喜ばすことが出来たけれども、今は無理ね……名状しがたいことだけれど、主任司祭さまにお話ししたの、だってけしからぬ話だもの……それで私たちは、あの女の行動の責任は、あなたの親戚のひとりにあると結論付けたの……ロルサックさん、それは、あなたのいとこのドランボー氏よ……お会いしたら、上出来よって、言っておいて……」

ふたりの若者は椅子の上で身をのけぞらせて笑い、同じ動作で喜びからステッキを握り締めた。

「ねえ、そんな恰好で、ママンたち、何処からいらしたの？」ダヴァランド夫人がその母と妹に訊ねた。

「競売場からよ」とモープラン夫人が答えた。バルースさんがわたしたちを絵画の展覧会に連れて行ってくださったの……」

「マンズベリー卿のコレクション」とルネが付け加えた。

「なら、わたしたちも競売場へ行かなきゃね、アンリエット」とテズィニー夫人が言った。「行ってロココ美術にひたりましょうよ……とても楽しいわよ」

「あなた、ラ・ペトルッチの展覧会はご覧になられて?」とサン＝ソヴール夫人が言った。

「彼女、コレクションを売りに出しているの?」テズィニー夫人が訊ねる。

「行きたかったわ……」とダヴァランド夫人。「あなたが行くのを知っていたなら……」

「わたしたち、一家そろって行ったのよ……」サン＝ソヴール夫人が遮った。「驚きだったのは……宝石の陳列窓があって、なかでも黒真珠の首飾りがよかったわ……あなたが御覧になられていたら!……三連よ……あれをくださる旦那様なんて、社交界にはいないわよ、国を挙げての募金が必要よ……」

「今日はご主人にはお会い出来ないのかしら?」モープラン夫人はダヴァランド夫人に訊ねた。

「あら! わたしがお客を迎える日はいないのよ、あのひと、おかげさまで!」そう言ってダヴァランド夫人は後ろから誰かが入って来たのを聞いて振り返ったが、それはバルースで、競売場でモープラン夫人が出会ったときにいた青年もその後からついて来た。

「おや! またお会いしましたね」と言って彼は椅子の上に小さな紙挟みを置いたが、それから離れようとはしなかった。

ルネは微笑んだ。

お喋りがまた始まった。

「あなた、この小説……この小説、読んで?」

「コンスティテューシオネル紙に紹介してある本よ」

「わたしは読んでないわ」

「何でしたっけ……ああ！　名前を忘れてしまったわ……なんて言ったかしら……お待ちになって……」
「この本の話題でもちきりよ……」
「お読みなさいよ……」
「サークルで主人がわたしのために借りて来てくれるでしょう……」
「このお芝居は面白いかしら？」
「わたし、悲劇しか好きじゃないの」
「そのお芝居、見に行かない？」
「桟敷、予約しましょうよ」
「金曜日がいいかしら」
「いや、土曜日がいいわ」
「後で夕食を取るとしたら？」
「それよ」
「プロヴァンス料理にする？」
「ご主人はいらっしゃるの？」
「そうね！　来るでしょ、あの人のことだから……」
話したり、返事をしたり、聞いていなかったり。皆、いっしょに、ぺちゃくちゃしゃべっていた。言葉、質問、声がお喋りのなかで交差して、まるで大鳥籠の囀りの様だった。ドアがあいた。
「お気になさらないでください、皆さん」背が高く痩せて、黒い服を着た若い女が入ってきて言った。「通りがかりに昇ってきただけですから、すぐおいとま致しますので……」

彼女は夫人たちに挨拶し、暖炉の前に立ち、肘を大理石板の上につき、両の手はマフの中に入れ、鏡のなかに一瞥を投げかけてから、ちょっとスカートの裾を引き上げ、火の方へブーツの小さく薄い靴底を伸ばして、再びしゃべりだした。「アンリエット、わたくし、お仕事をお願いしに、とても大切なお仕事をお願いしに上ったのよ……ブロドメール家が開催する舞踏会への、お客の招待をあなたに是非お願いしたいのよ、ご存知でしょ、最近来たばかりの、あのアメリカ人の家庭、あの人たち、ラ・ペ街に四万フランのアパルトマンを所有しているのよ」

「あら！　ブロドメールさんなら」テズィニー夫人が言った。「ええ、わたくし……存じ上げてよ……」

「ですけれど、あなた」ダヴァランド夫人が言った。「けっこう微妙ね。だって、わたくし、彼らと面識がないんですもの……少なくとも、あなた、あの人たちの素性はご存知なんでしょ？」

「ですから！　アメリカ人で……綿と、ローソクと、染料のインジゴと、黒人奴隷の売買と、あと何だったかしら……そんなこんなでひと財産築いた人たちなんだけど、でも、そんな事が、わたしたちにとって何だっていうの！……それに、アメリカ人は、今はもう、受け入れられているし……わたしだったら、まず、舞踏会を主催する人たちには、ひとつの事しか望まないわ、それは、警察の一員でないことと夕食をたっぷりと出してくれることよ……あのひとたちだったら、ご馳走してくれるんじゃない、きっと……奥さんは驚くべき人物よ……処女林みたいなフランス語を話すのよ……少女時代には、刺青を施したって話よ……だからローブ・デコルテを着られないんだってさ……　とても面白いじゃない！　会ったら、あなた、喜ぶわよ……あの人たち、立派な人たちを招きたがっているから、分るでしょ……わたしの顔を立てて、そうしてくれない？　ね。もし喪中でなかったら、このわたしが招待状の下に、「レルモン男爵夫人より……」と書き入れるところよ、請合うわ。それにあの人たち、いい事たくさんしているのよ……ああ！　それは確か……あなたに対しても、何かしてくれるに違いな

いわ」

「あら！　冗談はよして、もしわたしがお客の招待を担当しても、お礼の品なんか欲しくないわ……」

「あなたって面白い人ね！　でも日頃そういうことは行われているじゃない……習慣の問題よ……今の様子じゃ、年始に、あそこの若者たちから、一袋のマロン・グラッセを贈られても拒否しそうな勢いだわ！　それでは、帰るわね……あした連れてくるから、例のわたくしの非社交的な知人たちを……さようなら、さようなら……ここいらで、わたくし、お暇致しますわ……」

この言葉を残して、彼女は去った。

「本当なの？」ルネは姉に訊ねた。

「何が？」

「舞踏会に社交人士を供給しなくてはならないってことでしょ？」

「あら、知らなかったの？」

「わたしもそんなこと、知りませんでした」バルースが連れてきた若い男が言った。

「その方法が、とても便利なのよ、外国人にとっては」ダヴァランド夫人が話を繋いだ。

「まあ、そうですが、それって、パリジャンたちにとっては、けっこう屈辱ですよね、わたしはそう思いますけど、違いますかね？　お嬢さん」そう言うと若い男はモープラン嬢の方を向いた。

「でも！　そういうことは受け入れられているから」とダヴァランド夫人が言った。

二十三

ブルジョ夫人は、娘と一緒についさっきモープラン家に到着したところだった。夫人はルネの額に接吻して、それから暖炉近くにあるソファに掛けているモープラン夫人の隣に坐った。

「お嬢さんたち」部屋の隅でぺちゃくちゃお喋りをしている二人の娘のほうを振り返ってブルジョ夫人が言った。「すこし、お母さんたちにお喋りさせてくれないかしら？　一寸のあいだ、ノエミとどこかへ行ってらして、ルネさん、娘をお預けするわ」

ルネはノエミの腰を摑んで、飛び上がる様にして連れ去り、控えの間の椅子の上からピレネー地方の婦人用頭巾を取り上げて頭に被ると、とても小さな木靴を履いて、陽気に庭を、少女のような跳躍をもって、友達から手を離すことなく走り出した。そうして突然立ち止まり、ひどく息を切らした状態で「秘密があるのよ！　秘密があるのよ！　何の秘密だか、知ってて？」

ノエミは彼女を悲しみを湛えた大きな双眸で見詰めた。

「ばかね！」ルネは言って彼女を抱き締めた。「あたし、見抜いてしまったの……聞いてしまったのよ……ママンはほんと、大変よ！……あのね、あたしのお兄さまの事なの、そうなのよ……」

「坐りましょう、ね？　あたし、疲れたわ」

そう言うとノエミはベンチに坐ったが、そこは芝居をした夜、彼女の母が坐った場所であった。

「え、泣いているの？　どうしたの？」ルネが言った。そうして彼女は友達の隣に坐った。ノエミはその頭をルネの肩の上に乗せてから腕に沿って滑らせ、涙に暮れたが、ルネは、落ちてきたその大粒の涙を手の上にとて

も温かく感じた。

「どうしたの？　言って！　あたしに返事して！　お話ししてよ！……ノエミ……さあ、ノエミちゃん？」

「ああ！　あなたは、知らないのよ……」ノエミは途切れ途切れに、息を切らしているかのように返事をした。「お話ししたくない……ほっといて……もしあなたが知ったら！……わたしを助けて！」そう言って彼女は絶望したようにルネの首にしがみついた。「とにかく大好きよ、あなたのことが！」

「ねえ、ノエミったら、ぜんぜん分らないじゃないの……このあいだの結婚のはなし？　あたしの兄のこと？　あたし、あなたに返事をして欲しいのよ、分るでしょ？」

「ああ！　そうよね、あなたは彼の妹だものね……そうね！　わたし、それを考えるの、忘れてたわ……あなたには分らないでしょうね？　わたし、死んでしまいたいのよ……」

「死ぬって！　どうして？……」

「だって！　あなたのお兄さまが……」

言おうとしている内容を大きな声で話してしまうことへの恐怖にかられて言い淀み、語末をルネの耳もとで囁くと、ノエミはその頭を友だちの胸元へ落とし、恥ずかしい思いと、火照った頬をそこに隠した。

「あたしの兄さんが？……あなた、そう言ったわね？……嘘でしょ！」言ってノエミを押し返すと、ルネはさっと友だちと正面から向き合った。

「わたしが嘘を？」そう言ってから返答のすべてを籠め、ノエミは真実に輝く瞳をルネのほうにゆっくりと上げた。

この視線の前で、ルネは腕組みをした。彼女は少しの間、決然とした、力の籠った、内省的な態度で、きちっと背筋を伸ばして沈黙していた。彼女は、女が持ちうる力、悲しむ子供のそばにいる母の義務のようなものを感

じていた。彼女はまた、口を開いた。

「でもあなたのお父さまは何て言っているの?……あたしの兄さんは土地の名を持たないでしょ……」

「だからひとつ選び取らなくちゃならないのよ……」

「ああ！　兄さんはあたしたちの家族の名前を棄てるのね！……よくやるわね！」

二十四

「おや！　お前か?　まだ寝ていなかったの?」アンリは、夜になってルネが彼の部屋に入って来たときにそう言った。彼は喫煙をしていた。スリッパを履き、安楽椅子に深々と身を沈め、その両足を暖炉の大理石板の上に投げ出した彼は、最後の一本の葉巻の煙を天井に向けてゆっくりと立ち昇らせながら、男が自分の夢に思いを馳せるあの至福の時のなかにいた。

ここ二三ヶ月のあいだに自分の身に起こったすべてのことを彼は考えていた。彼は非常に上手に立ち回ることができたのを喜んでいた。彼の頭の中を再びよぎっていたのは、夜、庭で恐らくはほんの思いつきで提案したあの芝居のアイデアや、ノエミを安心させ、嫌悪感を催させず、彼女の口から一緒に演じるのを拒む言葉を出させないために始めの方の稽古を欠席し、彼女といるときにはわざと冷淡な無関心を衒ってみせたこと等々であった。彼はまた、役柄が心の秘密を引き出すかのように漏らしてみせた自身の恋心を、芝居の成功の最中で突然示してノエミの母親に嫉妬の情を掻き立たせた、あの自身の名人芸について思った。それに続いた出来事、ノエミの母との愛を極端に絶望的に演出した方法や彼女と最期に会ったときの自分の立ち居振る舞いなどのすべてのことが彼の脳中に蘇り、前もって用意し、工夫し、調整し、非常に自然な形で四十女の情熱に訴えかけた多くの状況を

思い出しながら、彼は自分の能力にある種の誇りを感じていた。

「あたし……今夜は眠りたくないの」そう言ってルネは暖炉のそばから低い炉辺椅子を引っ張り出すとそこに腰掛けた。「あたし、お喋りがしたいの、昔、あたしたちがそうしていたように、覚えているでしょ？　まだ兄さんがパリにアパルトマンを持っていなかった頃のこと……ああ！　兄さんが、葉巻やパイプや、ここにある全てのものをあたしの身近なものにしてくれたんだったわ。みんなが寝静まるころ、あたしたちは長々とこれらの品々についてお喋りしたものだったわね。あたしたち、この暖炉のある隅で、よく笑い、よく馬鹿なことを話したわね……今じゃ、あたしのお兄さまも、真面目な人になってしまったけれど……」

「最高に真面目な事があってね」微笑みながらアンリが言った。「ぼく、結婚するんだ」

「ああ！」と彼女。「なさらないで……お願いだから……」

そう言って彼女はひざまずき、彼の手を取って、「ねえ、あたしを見て……ああ！　思いとどまって……お金のためだなんて！　あたし、ひれ伏すわ、見ての通りよ。それに、父親の苗字を棄てると不幸になるわ……あたしたちの血統じゃない、あの名前は、アンリ……あたしたちの良いお父さまのことを思って！　この結婚を取りやめにして、お願いよ……あたしのことが好きなら、あたしたち家族みんなのことが好きなら……ああ！　お願い！」

「ああ、そのことか、お前、気でも狂ったのか？　なんだい、その恰好は？……ほら、もうたくさんだ、立てよ！」

ルネは再び立ち上がり、視線を兄のそれに重ねて言った。「ノエミがあたしに教えてくれたの、ぜんぶ！」

彼女の両の頬は赤みがさした。アンリは顔に唾されたかのように蒼白になった。

「だけど、あなたはあの夫人の娘とは結婚できないわよ！」彼女は大声を出した。

「いい子だから」アンリは冷淡な震える声で言った。「あなたは、自分に関係のないことに嘴を突っ込んでいると思うが……じゃあ説明させてもらおう、ある種の若い娘にとっては……」

「ああ！　あたしが出会ってはならないような堕落よ、本当に！……あんたがいなければ、けして知ることがなかった類の腐敗だわ！」

「いい子になさい！……」

そう言うとアンリは妹のほうへ近付いた。彼は相手を怖がらせるような、内なる怒りに燃えていた。ルネは恐ろしくなり、退いた。彼は彼女の手を摑み、ドアのほうを示して言った。「出て行きなさい！」

彼は一瞬、廊下で彼女が壁に倒れ掛かって、手で支えているのを見た。

（つづく）

当翻訳は以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Renée Mauperin*, éd. Nadine Satiat, Flammarion, coll. GF, 1990, p. 151–168.